

三味線師

伊藤 順康

この世に一つとして同じ物は存在しないのが、「三雅」の三味線。演奏家に寄り添って、粹で繊細な音を生み出してきた職人の想いに耳を傾けた。



いとうのぶやす

1944年生まれ。
三雅3代目。

東京都中央区築地 4-5-16

三味線づくりは、音作り



上/三味線はバイオリンのように古くなるほど価値が増す楽器ではなく、劣化するため、定期的な調整が欠かせない。胴や棹を削り、皮を張り替えながら、理想の音を作っていく。下/胴には紅木(こうき)やカリンの木などを使用。紅木はワシントン条約の規制対象で、認可機関を通じて仕入れる。皮や撥(ばち)の素材も年々入手が難しくなっているという

伝統音楽を支える縁の下の力持ち

歌舞伎座から歩いて五分ほど。築地市場跡地にもほど近い路地を進むと、「三雅」と控えめに掲げられた看板が目に入る。格子戸を開けると、かすかに三味線の音が聞こえてきた。店内には、ずらりと三味線が並ぶ光景を想像していたが、意外にもその姿はない。「うちは既製品を販売するのではなく、ご注文をいただいたから製作します。修理のご依頼も多いですよ」と、この道六〇余年となる伊藤順康さんは話す。

順康さんの父・鐵之助さんは、大阪で三味線職人に弟子入りし、大正十三年(一九二四)に独立。昭和二〇年代末頃、親交のあった清元樂壽郎、芳村伊十郎、五世杵屋佐吉の



木綿を湿らせて固く絞り、皮を伸ばしていく。水分量は電熱器で微調整する

三氏から「東京へ来てはどうか」と声がかかり、拠点を移した。「三雅」という屋号は、東京移転を機に新しい屋号をと三氏にすすめられてつけたものだという。

順康さんは父の下で兄弟子たちとともに技を学んだ。「最初のうちは何も教えてもらえず、職人たちの後片付けや道具の準備ばかり。手取り足取り教わるのではなく、自分から動け」ということだったんだでしょうね。三年ほど経ってようやく

く「(三味線作りを)やってみるか」と言われました」

かつては、棹や胴を木取りし、革を張り、糸巻を作るまで、すべての工程を一人の職人が担っていた。現在、順康さんは、音色を左右する「心臓部」ともいえる皮張りの作業を主に手がけている。扱うのは長唄、清元、常磐津など歌舞伎音楽に用いられる細棹・中棹の三味線が中心で、顧客のほとんどはプロの演奏家だ。「今、歌舞伎座にいるから修理に来てほしい」と、急ぎよ呼び出されることも少なくないという。

使用する木材、皮、糸、接着に使う糊などは天然素材のため、仕入れた素材の個体差に加え、気温や湿度によっても仕上がりは微妙に変わる。音の調整には音感も必要で、高度な感覚と経験が求められる。加えて、

二百名を超える顧客一人ひとりの要望が違うのだから、頭の中には千通りもの組み合わせがインプットされているという。「演奏家の皆さんは『この一曲のためなら皮が破けても構わない』という覚悟で舞台上に臨まれます。ある先生と一緒に夜中から明け方四時頃まで三味線の音を調整していたら、奥様から『お父ちゃん、そろそろ三雅さんを帰してあげなさいよ』と言われたこともありますね(笑)」

今、二人の息子が順康さんの背中を追い、共に作業場に詰めている。誠実な仕事ぶりは、さぞ高く評価されているのでは——そう水を向けると、「いえ、『もっとこうしてほしい』というご要望やお叱りの方が多いですよ。でもそれはお褒めの言葉だと思っています。貴重な情報をいただいているからこそ私たちも成長できるんです」と穏やかに言葉を継いだ。



「伝統音楽の灯が絶えないように、微力ながら力を尽くしたいと思っています」